

戸と窓の間

松 下 正 行

Hall between the Door and the Window

Masayuki MATSUSHITA

Abstract

Mr. YAGI, Toshio gave a special lecture titled “On the completion of the translation of *The Scarlet Letter*” to the 12th national conference of Japan Nathaniel Hawthorne Society. He pointed out a question why “Governor Bellingham stepped through the window into the hall, followed by his three guests.” It is one of his topics he mentioned in his lecture. Though some attendants made some comments on it, I am afraid there were not any settled answers given to it.

Later I found Mr. YAGI made a note about it in his translation which reads mado (it means a window in Japanese) is no “mis-translation.” It seems to be an open question still. I wonder any simple English-Japanese dictionaries give a clue to this question. An explanation on window in one of them reads window means any opening in the wall, a door closing it or space just inside of the window as well. Any Western house has two doors: a front or hall-door and a rear or back one. In between there are windows about the house. One of them is a long or large window to it. It is a door, another door. Most of the Westerners take it for granted that they can step or walk in through some type of window in a hall or large room of any Western style house. We would like to make clear of any possibility of a unity between window and door through their cultural back-ground and literary value. The Westerners prefer more air or wind, more light and more warmth into any rooms of their house. Some windows get taller and larger enough to be doors. Through more light we can see more of Hester and Pearl, and both of them are more conspicuous, impressive and significant in the present work.

戸と窓の間

日本ナサニール・ホーソーン協会第12回全国大会¹⁾において、八木敏夫氏が『緋文字』を訳して」と題して、特別講演をされた。その中で、「ベリンガム総督が「窓」を通過して広間に入り、彼のお客も後につづいた」と言う文章の中に出てくる入口となっている「窓」も問題の一つであるとして言及され、参加者も議論に加わったものの結論にまでは到らなかったと記憶している。先の訳本にも注²⁾が施されていて、講演の際に配付された資料の図面が文章によって忠実に解説されている。要約すると「謹厳な清教徒のお偉方が「窓」から出入りするのとは奇異な感じがするかもしれないが、「誤訳」ではない。」とすることになる。資料の図面の空白の部分に英語の原文が引用され、「窓」の単語が注釈者による斜体文字となっている。さらに、この「窓」のある「広間」が説明されている。その一方には「玄関」があり、反対側には「弓張り状に張り出した出窓」があり、この内側には「台座」がある。この「出窓」は、一般に見られる「出窓」とは異なっているので、外側に「踏み石」がある。入口としても使用されているので、「この「窓」は観音開き」と考えるのが順当とされている。これら「出窓」と「窓」は、一体の同一物と思われるが、あるいは、さらに、別の建具と考えられているのかもしれない。注の最後は、「ともあれ、出入口の代用を果たす出窓が、ゴシック建築様式期（17世紀ニューイングランドの建築様式はイギリス・ゴシック様式の延長であり、これは英国では17世紀中葉までつづいた）に存在したとは思われない」とされていて、この「窓」、「出窓」は作者自身の創作で、ロマンスに相応しい道具立てと言えるのかもしれないが、いまひとつ、鮮明さに欠けるようなので考えてみたい。

この作品の第7章「総督の広間」³⁾において、ヘスター・プリンは、ある日ベリンガム総督の邸宅に赴く。彼女は二つの目的を持っている。一つは、彼から注文を貰って仕上げた一対の手袋を届けること、もう一つは、彼女にとってこれよりももっと重要なものである。それは、教会や政治の場でより厳しい秩序を維持することに熱心な指導者の幾人かが、彼女から彼女の子供を取り上げて

1) 1993年5月14日、日本大学文理学部で開催された。

2) ホーソーン作、八木敏夫訳 完訳『緋文字』岩波文庫、1992年、376頁。

3) 作品のテキストとして、*The Scarlet Letter*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Vol.I, Ohio State University Press, 1971. (以下SLと省略する)を使用する。

養育することが、社会にとってより好ましい、ないしは、必要なことだと策を練っているのではないかという噂であった。これを確かめるためにも、ベリングラム総督に面会して、これが事実とすれば、彼にそれを取り消してもらう決心をして出発しているのである。ヘスター・プリンは娘のパールと一緒に、彼女たちの「小屋窓」(the cottage-window)しかない、人里離れた一軒家の戸口先(the door-way)から出掛けたのである。途中、二人は、村の悪童たちに泥を投げつけられそうになるが、パールが撃退して何とか目的場所にたどり着くことが出来る。

Without further adventure, they reached the dwelling of Governor Bellingham. This was a large wooden house, built in a fashion of which there are specimens still extant in the streets of our elder towns; now moss-grown, crumbling to decay, and melancholy at heart with the many sorrowful or joyful occurrences, remembered or forgotten, that have happened, and passed away, within their dusky chambers. Then, however, there was the freshness of the passing year on its exterior, and the cheerfulness, gleaming forth from the sunny windows, of a human habitation into which death had never entered. It had indeed a very cheery aspect; the walls being overspread with a kind of stucco, in which fragments of broken glass were plentifully intermixed; so that, when the sunshine fell aslant-wise over the front of the edifice, it glittered and sparkled as if diamonds had been flung against it by the double handful. The brilliancy might have befitted Aladin's palace, rather than the mansion of a grave old Puritan ruler. It was further decorated with strange and seemingly cabalistic figures and diagrams, suitable to the quaint taste of the age, which had been drawn in the stucco when newly laid on, and had now grown hard and durable, for the admiration of after times.⁴⁾

母と娘は、ベリングラム総督の「住居」に着く。これは「大きな木造の家」である。ニューイングランドの古い街の大通りには、この作品が書かれた当時、まだ残っているのが見受けられたかもしれない様式の造りのものである。しかし、

4) SL, p.103.

年代ものの建物であるため、苔むしてしまい、今にも崩れてしまいそうになっている。おぐらい部屋という部屋の中で起きたり消えていった数限り無いよしなしごとが記憶に留められたり忘れ去られて、家の心の部分で病んでいる。ところが、竣工になった当初には、その家の外観に最初の年の初々しきがあり、「人の住処」としての陽気さが、太陽の光をふんだんに受けている窓という窓からほとばしりでている。死に神はまだ踏み込んでいない。おめでたい顔つきをしていて壁という壁は、こまかく砕いたガラスの破片が混ぜられた漆喰で塗り固められている。その為もあって、「建物」の正面一杯に、太陽が斜めに射すと、ダイヤモンドを投げつけたようにきららと光る。この輝きは、年寄りの清教徒為政者の「邸宅」と言うよりも、アラジンの宮殿にこそ相応しい物である。さらに、漆喰には不思議な秘義に満ちた人型や紋様の装飾が施されている。

この引用部分において注目されることは、この章の最初で言及されている「総督の広間」の入っている家が、「邸宅」に始まり、「邸宅」で締めくくられるまで、「住居」「大きな木造の家」「人の住処」「建物」と変化させられながら、ヘスターとパールがそれに接近していくとき、遠近法によってその全体像に迫っていったことである。勿論、この家は、先に見たヘスターとパールの住処である「小屋」と対照されている。これが質素で簡素な造りの建物であるのに対して、ベリンガム総督の「邸宅」の贅沢で豪華さが強調されているのが容易に理解される。この表面の華美を指摘した直後、その裏側にへばりつくように隠れている悲しみ、痛みの心臓部に切り込んでいくのが、この作者ホーソーンのよく用いる手法の一つであることはよく知られていることである。

さらによく見てみると、この日は天気もよく太陽が出ているだけでなく、照りつけているような印象を受ける。少なくない窓に太陽が反射して輝き、一つの太陽を数えきれない輝く星にするガラス片が漆喰に塗り込められている。それらの星はこれまた数えきれない光の玉、ダイヤモンドに例えられている。きらめきの支配する不夜城の趣がある。「邸宅」はこのように、光に包まれて、鏡の役割をする窓とガラス片が、受けた光をそのまま反射、転送していると言える。「漆喰には不思議な秘義に満ちた人型や紋様」と相まって、この光が、当時の、これまた時代の建築における奇妙な美意識でもあったと説明されている。

この建物全体から反射しているきらめきを、パールは玩具にするといって、はぎ取って欲しいと母親にねだる。闇を生きているヘスターにはきらめきの持ち合わせなど全く無く、パールは自分自身のきらめきを集めなくてはならないと諭される。やがて二人は建物の正面の玄関の戸の所にやって来る。

They approached the door; which was of an arched form, and flanked on each side by a narrow tower or projection of the edifice, in both of which were lattice-windows, with wooden shutters to close over them at need. Lifting the iron hammer that hung at the portal, Hester Prynne gave a summons, which was answered by one of the Governor's bond-servants; a free-born Englishman, but now a seven year's slave. During that term he was to be the property of his master, and as much a commodity of bargain and sale as an ox, or a jointstool. The serf wore the blue coat, which was the customary garb of servingmen at that period, and long before, in the old hereditary halls of England.⁵⁾

ヘスター・プリンとパールは玄関と対峙し、その立派で頑丈な扉を見据えながら身づくろいをしていると思われる。よく見るとこの扉を中心とした玄関との一体構造は一風変わっているとも言えるが、詳しく書き込まれていることに驚かされる。先ず、「戸」の形態であるが、上の部分が尖って彎曲している。その両脇が、各々細い塔と呼ばばいいかせりもちと呼ばばよいか、建物からの出っ張りによって支えられ固められているのである。さらに、これら両脇の塔または出っ張りを格子で覆い、その背後に控える窓ガラスの弱さ脆さを補強した上に、木製の日覆いが付いているという手のこみようなのである。ガラス窓の棧には、当時としては一般的に新しいと思われる鉛が使用されてダイヤモンド形のガラスが嵌められ、それらを支えているとすれば、その弱さ無防備性を補う意味からも格子の必要性は容易に理解できる。木製の日覆い、ないし、目覆いであるが、ヘスターとパールが目にしたのが窓の外側か、さらにその奥に目を移した際に見つけた物なのか定かではない。いずれにしても、中央が競り上がって彎曲した戸、菱形ガラスを嵌め、それを補強する格子付きの小塔は外敵から家、その中の住人を守ること、光を十二分に室内に取り込むことと言った実用性と装飾性を両立させる工夫であることが見て取れる。勿論、この日覆い、目覆いは、十二分に取り入れる筈の日光を遮って光量を調節することと、部屋の内部の秘密性を確保することにも役立った装置である。私たちの現代生活におけると同じ窓の効用、実用性を予知させるものがある。頑丈な扉と、補強されているとはいえ脆弱とも言える小塔は構造物としては、この様に本質的には相いれない物である。

このような、総督の「邸宅」の玄関では、入廷許可を得なくてはならない。

5) *Ibidem*, p.103~104.

先ずは、玄関近くに備えつけてある鉄製の槌で、客の来訪を告げる。主人が直接それに対応するのではなく、他人、使用人が対応して主人を守るのである。戸の楯につづいて、楯になる人が出てきて客として受け入れるか否かを決めるのである。これが、ここでは、総督の複数いる奴隷の一人によって行われている。新大陸にあっても、由緒正しい家の広間にはイギリス譲りの青い制服を着せられた召使、奴隷、使用人が客の対応、接待をするのである。対応に出た召使は、イギリスからの新参者であるので、目にしたこともない緋文字に目をむくと同時に、主人の在宅と先客との会談を告げてヘスターとの会見を断るが、彼女は自分の意思、決心を変えることなく戸をくぐり抜ける。彼女の胸の緋文字の輝きと決意にあてられて顔まで青くなった召使は、母親と娘パールを戸口に控えた広間にとうてしまう。

So the mother and little Pearl were admitted into the hall of entrance. With many variations, suggested by the nature of his building-materials, diversity of climate, and a different mode of social life, Governor Bellingham had planned his new habitation after the residences of gentlemen of fair estate in his native land. Here, then, was a wide and reasonably lofty hall, extending through the whole depth of the house, and forming medium of general communication, more or less directly, with all the other apartments. At one extremity, this spacious room was lighted by the windows of the two towers, which formed a small recess on either side of the portal. At the other end, though partly muffled by a curtain, it was more powerfully illuminated by one of those embowed hall-windows which we read of in old books, and which was provided with a deep and cushioned seat. Here, on the cushion, lay a folio tome, probably of the Chronicles of England, or other such substantial literature; even as, in our own days, we scatter gilded volumes on the centre-table, to be turned over by the casual guest.⁶⁾

広間に通されたヘスターとパールは、ここでは、先程とは違って、「邸宅」の外側からではなく、内側から入口、玄関とその対極にある「窓」のある広間を再度見ている。建材の性質とか、気候の差とか、社会生活の異質な様式等に影響されての、数々の変換を余儀なくされつつも、ベリಂಗム総督は自分の生まれ

6) *Ibidem*, p.104~105.

故郷、イギリスに残してきた立派な財産家である紳士たちの家屋に倣って、自分の新しい住処を設計している。ここで、目にしているのは広いうえに、かなり高い天井の広間で、それも家の表から裏まですっかり延びている。そうして、これがありとあらゆる残りの小部屋への全ての連絡中継中心地帯の役割を果たしている。このゆったりした部屋の一方の極には明かり取りとして二柱の塔を作っている二つの窓があり、玄関のいずれの側でも狭い窪みを作っている。ここで注目されるのは、戸の両側に設置されている窓から入ってくる光による部屋の明るさである。格子と日覆いへの言及はなくなっている。日覆いが設けられていたとしても、この日には日覆いはすっかり開かれていて、日光を最大限に取り入れているとも考えられる。部屋のもう一方の極、端では、昔の書物の中で説明されたりしているので、読むことのある例の出窓の様式をした広間の窓と言ってよい物によって、入口からよりもより強力に広間が明るくなっているのである。格子はなく、日覆いもなく、その代わりにカーテンが下げられていて、それが出窓の光調節をすることになっている。格子と日覆いの言及がされていないということは、両者が欠落していると考えるのが妥当であるが、玄関の戸と、その周りが上の様に描写が詳細を極めているのとは対照の差が大きすぎる様に思われる。考えられることとしては、防犯における不安が余りなく、もっぱらこの窓が外からの光を十二分に取り入れる構造物としての目的を担っていることになる。そうして、この出窓の内側にふかふかした座部のついた長椅子が備えてある。その上に英国史の分厚い書物であろう、のせられている。このように、入口につづく広間は、その両極にそれぞれ戸と窓を具えた大きな部屋、間、広間となっているのである。

この出窓の構造については、作者が、当時書物にも説明されているのを読んだと書いている。どの様な書物を読めば理解できるのであろうか。たちまちは、その直後に言及のある英国史などの書物であろうか。少なくとも、作者ホーソーはこの謎を解く鍵のみはわれわれ読者に手渡してくれている様にも思われる。書物では、一般的に広間用の出窓と呼ばれるものが用いられる様になっていたと思われる。八木氏が配付された資料に、ここの部分が引用されている。訳本の注にも、少し進んだ所で、これについて解説がされている。また、資料では、広間と出窓のための三つの図面が載せられている。それらは、各々番号が付けられて、3 典型的なニューイングランドの家、4 イギリスの中世の家、5 ベリンガムの家と呼ばれている。先の出窓があるのは、4、と5においてである。4にあるのが、普通の窓が二つと出窓が二つであり、部屋の相対する壁に向かい合って一対ずつ並んでいる。ところで、この出窓は英語では bay window と呼ばれていて、原文の“those embowed hall-windows”とは

異なるものではないかと思われる。前者は、窓枠が角張っている。図面もそれ
を表している。後者は、窓枠が外に向かって弓状に緩やかに張り出している。
この形、曲線は、玄関の戸の上の形にも見られたもので、これと一致する事が
重要ではないかと思われる。それによって、この建物、少なくとも、この広間
の造作に統一が保たれているものと言える。さらに、広間の窓と言う複合語は
OED にも見つけることが出来ない作者の造語であることから、この建物、と
りわけ、この部屋、広間に対する、彼の特別の思い入れ、ないし、意匠が感じ
られる。さて、先の引用のつづきに戻ると、広間に据えられている家具、調度
品が紹介されている。幾つかの重そうな椅子、それらの背もたれには櫟のはな
ずなが精巧に彫り込まれている。同様な細工ものの机が一脚置かれている。全
てこれらの品々は、エリザベス朝時代か、それよりも、昔の品物で、世襲財産
として、総督の父方から譲り受けた上に、本国、イギリスからアメリカまで移
入されたものである。机の上には、客人をもてなすためのビール用の大きな容
器が置かれている。これから注がれた容器は机の上には残されていない。客人
が手にしているのであろうか。何故彼らを交えて、主人が話し合わなくてはな
らない話題が特別な話題の折りに、酒を口にすることが出来るのか考えてみる
と、皮肉が込められていることがわかる。

次の調度品と言うのが適切か、それとも、装飾品と言うべきか、四つの壁の、
戸と出窓を除いた残り二つの内の一つに、ベリンガム一統の先祖達の肖像画が
列をなして懸かっている。彼らは二つの組に分類される。胸を武具で固めた戦
争の使者と、堂々とした首飾り、襟飾り、袖飾りを纏った平和の使者である。
いずれの組の使者たちに見られる共通点は峻厳さ厳格さで、なみいる人物たち
は肖像画と言うよりも、亡霊と呼ぶことのほうが似つかわしいと思われるほど
であった。それらは、生きている人々の任務だとか娯楽とか言った人間の営み
を厳しく見るに耐えないとばかりににらみつけ、凝視しているように見える。
広間の壁は櫟の木の板で内張りされている。残った壁一面の中心あたりに鎧一
式が飾られている。昔の遺品と言うよりも、ごくごく最近の製作によるもので、
ベリンガム総督がニューイングランドに移住した1634年にロンドンにおいて特
注で作らせた。色々な部分から成り立っていて、それらが分解して壁板に懸け
られているわけであるが、頭覆いと胴鎧が二度繰り返されて強調されているこ
とに思い当たる。これら全ての部品は鋼鉄性で、とりわけ強調されているこれ
ら二つのヘルメットとキューラッスはぴかぴかに磨かれ艶だしされている。
各々が白昼光に輝き、受けた光をそのまま反射させて床一面を明るく照らし浮
かび上がらせるためでもある。この明るく輝いている鎧一式は単なる見せ物で
はなく、模擬訓練場のみならず、総督が移住直後に参戦することになる1633年

から1637年のペコッド戦役で実際に着用されるものである。法律の専門家の訓練を受けたため政治家、統治者が本領を最も発揮できる部門ではあったが、アメリカと言う新興国家の非常事態にあっては、軍人にも早変わりするのである。その際に、彼の着用する鎧、兜を見たパールは、邸宅が見えてきたときに、その正面が照り返す輝きに喜びを感じたと同じように、今度は甲冑のきらめきに心を奪われて我を忘れてしまう。

それらに、彼女が見つけたものは、果たして何であったのであろうか。彼女は、母親に自分の発見したものを見るように命じる。子供騙しにお付き合いと言う積もりで目を向けてそこに発見したものは、彼女が胸に付けている緋文字Aである。胴鎧が凸面鏡の役割を担って、Aの文字のみを拡大し、その他一切を捨象してしまっているのである。ヘスター自身はその文字の背後に萎縮閉じ込められたままになっている。罪の化身とされているのである。罪の化身は、これ一つのみには止まらず、頭覆いにも映し出されている。娘のパールはこれを指さして、母親に目を向けるように、さらに催促している。パールの目に浮かんでいるのも、自分の胸のAであり、その底から透けて見えるのは子供なりではあるが、小賢しい妖精の知性である。その意地悪なほくそえみが、拡大、強化を受けて先の鏡の役割をしている頭覆いと胴鎧に写っている。それは、自分の子供の似姿とは言えず、悪鬼が姿をやつしてパールに成り代わっているに過ぎないと思ってしまう。母親は娘とその視線を鏡から逸らせ、窓の外庭、そこに咲く花へと向けさせようとする。それらの花は、人の手によって庭野に育てられたもので、自然に野に生えた花と同じように、少なくとも森のものとは異なりより美しいと諭す。

気持ちが急に変わったのか、素直に、パールは弓なりの出窓に走って行く。この出窓は広間の端にあり、庭の歩道の一方の端から、他の端まで見はるかすことができる⁷⁾。この直線性は、この出窓と玄関の戸を貫いている。歩道には短

7) *Ibidem*, p.106. 原文では “Pearl...looked along the vista of a garden walk....” となっている。16世紀のイタリアにおいて、都市全体が顕著な建造物によって星を散りばめられたように配置することが起こる。各々の近くには目印としてオペリスクが建てられるが、それを結ぶ線である道路を“vista”「通景」と呼んだ。これがやがて庭園にも取り入れられるようになったと思われる。玄関と反対側の裏戸からみはるかせる散歩道、滝、水路等からなる。スロープや斜面になっている場合もあり、舞台美術的な造形となることもある。『世界美術大全集』小学館、1994年、Vol. 16-62、「都市の通景」参照。

現在でも、次の例に見られるように庭を直接みとうせる視界を与えてくれる窓、戸が好まれる。Gracious details and a perspective on the garden combine in this light-filled Connecticut kitchen. “Country Living,” P.131, July 1997.

く刈り込まれた芝生が敷きつめられている。ところが、庭の主人は、その両側の草むらはうまい具合には育てられなくて、装飾性の勝った、本来はイギリス好みの造園趣味を、大西洋を越えてこちら側の厳しい土地柄と生存競争の激しい中で永続的に根づかせることの困難さに負けてしまってとっくの昔に諦めている様子である。育っているのはキャベツでよく見える所にある。すこし離れたところに根元のある南瓜の蔓が手前までの空間の至る所に延びて、巨大な実の一つが広間の窓の真下にでんと座っていて野菜の金塊もニューイングランドの土地が提供してくれる高価な装飾に違いないと総督に催促している様子である。その外に、薔薇が少しと、かなりの数の林檎の木がある。宗教にも政治にも興味を失って、変わり者扱いにされたブラックストン牧師が最初に植えたと言われている林檎の木の子孫である。薔薇の木を見ているパールは、真っ赤な薔薇の花を欲しがり、ヘスターが宥めてもすかしても収まらない。彼女は、庭に人の声がすることに託つけて、娘の注意を逸らす。総督と紳士達が共に近づくのに気がつく。見晴らしの効く庭の歩道⁸⁾をあちらの方角から家に近づく紳士たちが見える。パールは奇妙な叫び声をあげるが、静まる。母親の命令に従ったからではなく、初めて目にする人物たちに気を取られてしまうからである。

壁に懸けてある甲冑から庭に視線を移すパールの動きが出てきて、彼女が広間の中心からその一方の端に移る。そこが「弓なりに張り出した窓」「弓なりの出窓」である。さらに、これが「広間の窓」と書かれていて、先に見た「これらの弓なりの広間の窓」と同一の窓であることは容易に理解される。これに迫っている南瓜の表現からは、窓の下に敷居が、或いは、少し高い小さめの窓と考えられて、もう一つ別の窓を想定させるかも知れないが、広間の内部から外が良くみはるかせる類の窓で、数と大きさの点で、建築の中に占める窓の意味に変化が生まれていることが考えられる。ここで第7章が終わる。

しかし、第8章「妖精の子供と牧師」が始まっても、物語の舞台は変わることなく、これまでの広間と、それに到る庭の歩道はそのままで継続されている。広間に近づく重要人物達四名が、ベリングラム総督、ジョン・ウイルソン牧師、アーサー・デイズデイル牧師、ロジャー・チリングスワース医師の順序で公衆の面前に立つときは別の様子が紹介される。総督は公務を離れて自宅に籠もっているときには、年齢とは釣り合いととれるような若向きのだぶだぶの化粧着や締めりのない帽子を被ってしたり顔で、来訪者に自分の家屋

8) “In fact, adown the vista of the garden avenue, a number of persons were seen approaching towards the house.” SL, p.107.

敷を吹聴し、将来の改築、改良計画についてまでも事細かに説明しながら四人の先頭をきって近ずいて来る。灰色の顎髭の下で首の回りを一巡りしている大き過ぎるほどの、手の込んだ襷飾りは、流行遅れ気味である。それが大皿の役目を果たし、かれの頭はサロメの所望した首をはねられた福音者ヨハネに酷似している。着用されている服、帽子、襟巻き等の彼がその身邊を固めている世間的な奢侈贅沢を示す装飾は厳めしく厳しい霜たれた容姿とは全く相いれないと思われる。とかくこの世での人間の有り様となると、試練と戦闘が常態と喋ったり考えたりすることが習性となったり、お勤めのためとあれば、贅沢品や命までも犠牲は覚悟と涼しい顔で説教するものの、重々しい態度の御先祖様が手短にある慰み物や贅沢品をきっぱり退ける真心の塊である等と考えるならば、大間違いだと言う。彼の肩ごしに見えるウイルソン牧師もその様な信仰の義務になっていることなどを説いて聞かせるどころか、むしろ、奢侈贅沢を助長する様なことを説いて聞かせる。西洋梨や桃もニューイングランドの気候に馴染ませられるし、紫葡萄も日当たりの良い庭の壁に立てかける様な方法で花を咲かせられるかも知れないと勧める。この様に、この老練な牧師もあらゆる旨いこと心持ちの良いことには長い年月をかけて培われた、正当な趣味を身に着けている。ヘスター・プリンの犯した罪を説教台や公衆の面前でいくら厳しい顔をして責めたてても、個人生活での生まれつきの善行のために、人々は彼により深い愛情を降り注ぐことになっている。

総督とウイルソン氏につづいて残りの二人が紹介されている。その内の一人は、アーサー・デイズデイル牧師で、ヘスター・プリンがお仕置きを受けた際に、娘パールの父親が誰であるかを明らかにするように詰問した牧師として顔を見せた人物である。彼と特別に親しい関係にあるのがロジャー・チリングワースと名乗る腕の確かな内科医で、教会関係の激務に我を厭わず献身したためにすっかり体を壊した若い牧師の友人であり、同時に主治医でもある。これら四名の人達が広間に入ろうとしている。この場面は次のように描かれていて、八木氏も資料に引用されている。

The Governor, in advance of his visitors, ascended one or two steps, and, throwing open the leaves of the great hall-window, found himself close to little Pearl. The shadow of the curtain fell on Hester Prynne, and partially concealed her.⁹⁾

9) *Ibidem*, p.109.

訪問者に先立って、総督は階段を一段か二段上って大きな広間の窓の両扉を開け放つと、小さくて可愛いパールにぶつかりそうになる。カーテンの後ろに隠れているヘスター・プリンはよく見えない。この段階では、総督も他の三名の客人も広間には入っていない。窓は、大きいと断っているから今まで見てきた、広間の玄関の戸の対極にある、弓なりになっている出窓である。八木氏の訳では、これが「広間の窓の鎧戸」¹⁰⁾とされている。何故 「大きな」と「出窓」の「出」が無くなって、「鎧」が加わったのであろうか。この訳文であれば、ここには窓と鎧戸、より正確に言えば、窓ガラスの嵌まった窓とその外に、もう一つ鎧戸があることになる。玄関の両脇の塔の形をした窓において、既に見たとうり、鎧戸が有る場合、それを表す単語“shutter(s)”が使用されていたことがわかっている筈である。ここには、それが使用されていない。その代わりに使用されている単語“leaves”と言うのは、二枚一組の窓、「観音開き」の構造をした建具であると考えたほうが良さそうである。leafと言うのは、*OED*によると、「蝶番のついた物の一部分または蝶番によって横または端のところで連結されている繋がっているものの一つで、蝶番によって回転する戸、門、鎧戸の二つおよびそれ以上の部分の一つ」を指し示すことになる。定義には窓が入っていないが、引用されている例文にはそれが入ったものがあり、それらによってleafが限定されていて、それらの一部分になっていることが理解される。これだけで、鎧戸それ自身を表すことは無いようである。その代わりに、ここには窓が来ている。さらにこの窓にはカーテンが窓の内側に設けてあるので、日覆いの鎧戸は不要と考えられたのかもしれない。役割は同じことであっても、場所により、主として安全面からして庭に通じる裏の窓には、外からの鎧戸は無くても良かったのであろう。

ベリンガム総督は自分の正面に居る緋色の小さな姿を見て驚いてしまう。一体全体これが何なのかと困惑する。ジェイムズ王の時代、宮廷仮装舞踏会に呼ばれることを光栄と有り難がる、虚栄に満ちみちた若かかりし頃以来、お目にかかれなかった代物である。お祭り日になれば、沢山のちびっこ妖精が群がってクリスマスの宴会の司会者の子供と呼んでいるものであるが、それをどの様にして、この広間へのお客として招き入れたりしたのかと訝る。老いたウイルソン氏も同じ意見で、真っ赤な羽毛をした小鳥の様な女の子は太陽が極彩色のステインドグラスを透かして輝き金紅色をした姿が床の上をなぞるときに見たことがあるくらいであり、それも古き土地、イギリスでの事だとして呆れてし

10) 完訳『緋文字』155 頁。

まう。おかしい服装をさせる母親は一体誰なのか。キリスト教徒の子供なのか。教義問答を覚えているのか。或いは、魑魅魍魎なのかと訝りつづける。緋色の幻は、この謎に対して人間宣言をする。母親から生まれた子供であり、正式な呼び名もあり、それはパールであると言明する。赤い真珠等お目に掛かった試しのない老いた牧師は、着ている洋服の色のみから、むしろ、その名前はルビー、珊瑚、赤い薔薇にするほうが似つかわしいと皮肉を言い、本当に子供か否かを確かめるために、彼女の頬に触れようと手を伸ばしたものの、飛び去ってしまって触らせない。仕方なく、辺りを見回して母親を見つける。彼は、彼女が不幸で、ヘスター・プリンで、娘の母親であると言うが、総督はそれを否定し、緋色の女、淫婦と決めつけ、娘への母親の養育権をこれからしっかり論議しようと提案する。

Governor Bellingham stepped through the window into the hall, followed by his three guests.¹¹⁾

ここまでの対話は、窓を挟んで、その外に四人のお偉方がいて、その中にパールとヘスターがいて、両者は対峙した状態で行われている。総督を先頭にしてい、残る三名がそれにつづいて広間に入る。「窓」から入ると言う、「大会」で話題に取り上げられ訳本の注釈でも詳細な説明がなされた箇所でもある。この「窓」が、どの様な使用のされかたをしているのか、役割を見るために物語の進行を、今暫く辿ることとしよう。

直ちに、総督は緋文字を着けたヘスター・プリンに厳しい視線を向けて切りだす。彼女について大きな疑問が投げかけられている。権威ある為政者達が、近くにいる子供、パールの不滅の魂を落とし穴ばかりのこの世間で、躓き、事実、落ちてしまった者の指導に任せておくことが、果たして良心に恥じない行いなのか否かと言う疑問である。母親の責任から子供を開放することこそ、子供の当面も未来永劫の安寧に繋がるのではと諭す。忽ちは、地味な衣服に着替えさせて、厳しく躰け、天上、地上の真実をたたき込む必要を感じないのかと詰め寄る。同じ種類のことで何か子供のために尽くしてやれるものでもあるのかと尋ねる。果たして、彼女は、一歩たりとも引き下がることなく、赤い印から教わったことを自分の可愛いパールに教えてやれるだけだと答える。総督は、それが恥の勲章で、その文字がなぞる染み故に、子供をその母親から引き離し

11) SL, p.110.

て養育しなければ災いとなると主張する。この勲章によって、彼女は、あの時から現在まで、毎日、この瞬間も、様々な教訓を教えられ、それらを、子供に教えることで、自らは得るものは無いとしても、娘はこれから賢く、立派になると信じている。

ベリングラムはパールの養育に関しては、余程注意を払わなくてはと肝に命じているので、先ず、ウイルソン師に彼女が年齢相当にキリスト教の養育を十分に授かっているか否かを試験してもらうことにする。牧師は、早速、依頼に応じて肘掛け椅子に腰掛け、両股の間にパールを引き寄せようとする。ところが、彼女は牧師の指図に従わないばかりか、自分の意思を主張して次のような行動に出る。

The old minister seated himself in an arm-chair, and made an effort to draw Pearl betwixt his knees. But the child, unaccustomed to the touch or familiarity of any but her mother, escaped through the open window and stood on the upper step, looking like a wild, tropical bird, of rich plumage, ready to take flight into the upper air. Mr. Wilson, not a little astonished at this outbreak, — for he was a grandfatherly sort of personage, and usually a vast favorite with children,— essayed, however, to proceed with the examination.¹²⁾

ウイルソン牧師は、部屋にあった数脚の椅子の一つに腰を下ろして、自らの意図にしたがってパールを自由に動かせるものと自認していた。牧師は歳も歳なので、それほど自由に動けるわけではない。彼女から置いてきぼりにされ、手持ち無沙汰のままである。他の三人も立ったままであろうが、そのまま、この場面に手の施しようもない。パールは、母親以外の人から親しみをもって触れられた事など、これまでに一度も無かったため、開いたままの窓から逃げだして、空高く舞い上がって行こうとするふさふさした羽の生えた野性の熱帯の小鳥のような姿をして階段の一番上の端のところに停まっている。ここに見られる「開いたままの窓」は、先程、ベリングラム総督と残りの三人のお客が入ってきた「窓」と同一の物である。別の物とする場合、床から離れて高くなっている上に、外側に恐らく階段が設けられて居ないと考えられるので、小鳥の様な、パールにとっては、興味深い点は認められるかもしれないが、子供にとっては、

12) *Ibidem*, p.111.

余りにも危険である。小鳥のように、小刻みに、窓の内外に移動する様子 of 描写と考えるに止めておこう。しかし、牧師はこのまま引き下がり諦めることなく、頼まれた試験を再開しようとする。この様な突発事故に、躊躇させられたものの、祖父の様な存在であり、何時もは、子供には人気者と自認していたからである。パールは、胸に刺繍の施された緋文字を着けなければならない母親と異なり、牧師たちの教えを守って胸には価値の高い真珠を着けられるようにしなくてはならないのである。彼女は教えどおりに、素直に「誰が彼女を造ったか」という質問に答えなくてはならない。事実、この成長段階に、パールは答えを知っている。敬虔な家庭に生まれて、育てられた娘であったヘスター・プリンは、彼女自身の娘であるパールに、天にいる父について話をした直後に、人間の魂をもっているものであれば、一生懸命に教え込みたいあらゆる真実を吹き込み始めているからである。年端のいかないとはいえ、3歳になっているパールは、ニューイングランド初級読本やウエストミンスター教義問答に載せられている質問には、実物を見たことがないとしても、答えることが出来るはずである。ところが、人一倍つむじ曲がりの癖の強い彼女は、最も不都合な瞬間に、この癖に取りつかれてしまい、口を噤むか、それを開いたかと思うと、相手の善良な牧師ウイルソンの気を損ねる言葉を吐いてしまう。彼女は決して造られたのでは無く、牢獄の門扉の傍らに生えている野性の薔薇の灌木から母親が手折りにしたものと宣言してしまう。

何故、この様な奇想天外な答えが出てくるのであろうか。次のような連想が、或いは、彼女の頭の中に沸いたのかも知れないという。

This fantasy was probably suggested by the near proximity of the Governor's red roses, as Pearl stood outside of the window; together with her recollection of the prison rose-bush, which she had passed in coming hither.¹³⁾

総督の庭に咲いている赤い薔薇との類似である。パールは窓の外に立っている。この日の朝、この邸宅に来るときに、通り過ぎた牢獄の薔薇を思い出したのかも知れない。彼女は窓の外側に出たままで、それを境として牧師を始めとして、大人と一戦を交えていると言える。この窓も、先程彼女が、牧師の両手、両膝から逃れて出ていった窓と同じものと言える。

13) *Ibidem*, p.112.

年老いたロジャー・チリングワースが顔に薄笑いを浮かべて、若い牧師に何やら意味慎重なことを耳うちする。彼は、やはりパールが罪人の子供で、正しい教義も教えられていないことの同意を、相手に求めたに違いない。ヘスター・プリンは、この瞬間、自分の娘から引き離される運命の大車輪が回転させられる危険に晒されているにもかかわらず、医術に長けた男に釘づけになり、夫婦であった頃からの変わりように驚愕の表情を見せてしまう。一瞬 二人は互いに視線を交わすが、彼女は我に返って重大な事の成り行きを見守る。年老いた牧師と医師、若い牧師につづいて総督は、冷静さを取戻し、パールにたいして、最終的な判断を下そうとする。3歳にもなる子供が、自分の造り主が誰なのかも知らないうえ、その魂も、魂の現状の墮落も、未来の運命も光を授かることなく、彼女は闇のなかを迷っているという。彼女に、これ以上問いただしても無駄であると結論づけて、すぐにでも母親から引き離そうとする。勿論、ヘスターは、パールを掴んで、無理矢理、両腕で抱きしめ、引き離されないようにする。ヘスターの顔と目は清教徒である年老いた為政者と対決し、その表情には猛々しさが見える。この世では孤立無援、むしろその世間から爪弾きされていて、なお、この唯一の宝がいるために彼女の心が生きつづけられるとなれば、彼女から奪うことの出来ない権利を持っていると感じ取り、世間を向こうに回して、死をものともせずそれを守る決意である。彼女は清教徒社会、その代表者との対決姿勢を鮮明にしていることが分かる。この瞬間に、ヘスターは何処に居るのだろうか。パールは広間の窓の外に居るのであるが、ヘスターが外に出るのか、パールが中に引き入れられるのか。後者と考えるのが順当であろう。しかし、この疑問に明確な回答がされている訳ではない。パールを抱きしめて、娘に対する母親の権利を、なみいる重要人物に、より近くで、より強力に訴えるのであれば、やはり彼女たちが居る所は窓の内側、広間の中と言うことになる筈である。

ヘスターの主張は、神が彼女に子供であるパールを授けられたのであるから、為政者、聖職者と言えども、人間が彼女からその子供を奪うことは出来ないとするものである。人間が彼女から奪った全ての物の代償に、神が女の子を授けられたとする。娘は母親の幸せであるとともに苦痛でもあり、それがために、子が親をこの世に引き留めて生かしつづけている。生きつづけることは、子が親を罰しつづけることに外ならない。子は緋文字であり、愛を授けられるためにいる。そのために却って、親の罪のために百万倍もの懲罰を与えるものとして授けられている。何人と言えども娘を奪うことは出来ない。奪われる様なことになれば、先ず自らの命を絶ってからであると言う。決して不親切と言う

訳ではない年老いた牧師は、ヘスターの主張を遮って、パールは、やはり母親の手でよりも、彼らを選んだ善良な他人の方が好ましいと反論する。自分の主張が容易には聞き入れられないもどかしさから、ヘスターは、神が娘を授けて手元において養育するように命じられたと繰り返し述べるが、その声は金きり声になる。次いで、娘を手放さないこと、諦めないことを再三再四訴えつづける。その時、これまで一度も目を向けたことの無かった若い牧師、デイルの方に向かって、彼女に代わって願いが聞き入れられる様に助け船を出して欲しいと嘆願する。彼こそは、彼女のかつての教区司祭であり、彼女の魂の守護者でもあったので、彼以外の同席者よりも彼女のことがより良く理解できるはずだからである。彼のほうが同情心に満ち、彼女の胸のうちを知り尽くし、母親の権利がどのようなものかを知り、子供と緋文字以外に何も残されているものが無いときの、母親の権利がどれ程の力を発揮するものかを知っている、唯一の人だからと言う。この繰り返される「知る」と言う言葉には、先の夫チリングワースが彼女を知っている以上の内容が含まれている事は言う迄もない。

ヘスター・プリンが娘パールから引き裂かれるのではないかと言う不安から彼女を追い詰めていることを示す、上記の常軌を逸した奇妙な言動は、彼女の錯乱か狂乱に近いものを示していると見届けた若い牧師は、一歩前に踏みだして総督、老牧師と医者に目を向ける。興奮すると何時もの習慣で、右手を心臓の上に置いている。三年前、彼がヘスターのお仕置き台に立った時に同席したよりも遙に打ちひしがれ痩せさらばえている。健康が優れないにしろ、その外の原因が有るにしろ、大きな黒い目のみが混乱と憂鬱に塗りつぶされた苦悩一色の世界を覗かせている。彼はヘスターの言葉とそれを吐かさずには置かない気持ちに真実が籠もっていることを認めると言う。彼の声は良く通り、振るえているものの、自信に満ち溢れている。広間とそこに飾ってある外に向かって膨らみを持っているために、それに写る影を拡大したように、今度は音を同じように四方八方に拡大する甲冑が彼の声をこだまさせる程である。彼は、パールを腕に抱いたヘスターと三人一組となって、もう一つの三人の組と対峙している。それ自身で一幅の活劇画となる場面である。また、神は彼女に子供を授けた上、その根本性質と必要物についての本能的な知識をも授けているとしている。この様に、この母親とこの子供との間にある関係に限って、いかなる他人も入り込む隙のない神聖さの要素が存在しているとする。何故なら、その論理が認められないかぎり、創造主である神は罪の行為を軽く見て清められない肉欲と清らかな愛の区別を無視することになるからである。何故神は、この子を、父親の罪と母親の恥から生まれた娘をこの世に遣わされているのか。母親

が熱心に、塗炭の苦しみを噛みしめながらも、命乞いをしているその心意気に、何か効用があればと察しての心遣いかもかもしれないとする。神からの彼女に対する恵、ただ一つの恵で、同時に天罰でもある。数えきれない思いがけない瞬間に、頭をもたげる苦悩、苦渋、苦痛、止むことのない苦悶であり、苦し紛れに喜んでいる最中に現れる。子供の衣服にそれが現れていて、無理矢理それが彼女の胸を焼き焦がす赤い印を思い出させる。しかし、ウイルソン氏はこの衣服の奇妙さこそ母親が子供を香具師にするため以外の何物でもないと反論する。

デймズデイル氏はこれを打ち消して、さらに主張しつづける。あの子供をこの世に存在させる事によって、神が行おうとした奇跡が起こることを母親は承知している。この恵によって彼女の命と同じ魂を鈍らせることなく、生きつづけさせる。生きるだけに留まらず、子供に恵まれていなければ、悪魔が餌食にしようと狙っている罪の闇底に嵌まることから彼女を守ることはできない。嬰兒のもつ不滅の魂、永遠の歓喜または悲嘆をもたらすことのできる存在者が彼女の世話に任される事によって、子供を彼女が義に導くよう鍛え上げ、自らには刻一刻墮落を思い出させ、それでもなお、子供を天に導けるなら、逆に、子供もその片親を其処まで同道してくれるものであると彼女に教えるならば、それこそ、この哀れで、罪深い女には良きことである。この処置が許されるならば、罪を負った母親は罪を負った父親よりも幸せなのである。この様に考えるならば、神の摂理にそって母子は、いままでどうり二人一緒にしておくに越したことはない結論づける。

この若い牧師からの訴えを聞かされた三人の重要人物はそれぞれ反応を述べる。老いたロジャー・チリングスワースは相手に対して微笑みながら、その迸る熱意に驚く。ウイルソン牧師は、話の内容に意味深長なところがあるのを認めたものの、自信がなくベリンガム総督の意見を求める。説得力の有ったことは認めている。総督も老牧師の判断を認めた上で、この様に具体的に論証をされては、問題をこれまでどうりとししないわけにも行かないだろうとする。条件として、母親にこれ以上の不都合がないこと、娘が教義問答の正式に確定した試験を受けて合格すること、および、就学年齢に達したら彼女が学校と教会に通うことが要求される。

一仕事終えて、若い牧師は皆の者から二、三步引き下がって、窓のカーテンの大きめの襞のなかに自分の顔を半ば隠すかのようにして立っている。日光が床に投げかけている彼の姿の影が、彼の直訴の熱気が冷めやらず振るえている。ここに見えるカーテンは複数で、二枚以上が懸かっているはずである。窓は日光を一杯受けているとすれば、南に面していて、出来るだけ大きいものが効果

的と言える。若いデイズデイル牧師の全身の影を作り、その震える様子が必要だからである。彼の背後に、ヘスターとパールが控えていると思われる。この窓のカーテンに身を半ば隠して立っていたのが、広間で総督を待っていたときのヘスターであった。カーテンが内側にあれば、外側に日除けの鎧戸はあるいは無くなっていたかもしれない。玄関で来訪者を厳重に調べて受け入れておけば、背後の出入り口の防備は出来るだけ少なくするほうが開放的であろう。

落ち着きのない、飛び跳ねるパールは、いつの間にか、母親の腕から、床に滑り降りて若い牧師に近寄っていき、その手を自分の両手で抱き、ほほずりする。その手つきのあまりの優しさと控えめな様子に見惚れていた母親は、これが自分の生んで育てている子供かと疑う。子供の心に愛の在ることを知らされる。何時もは激しく燃え上がるのであるが、この時ばかりは、優しさに支えられて和らいでいる。このような柔らかな愛情の表現を見せられたのはかつて無い経験である。他方、若い牧師は、女性からの、痺れを切らして待ちに待った愛顧を除けば、魂の本能から自然にほとばしりでる、そのために心から、本当に愛しても良い重大なものをかき立てる子供にしかない好みの印ほど美しいものはないと感じて、周囲を見回して、手を子供の頭に置いて、一瞬ためらったものの、彼女の額に唇で触れる。尋常でない彼女の気分は、この儘の状態を保つことに耐えかねて、笑い声を上げて、広間の一方の端に踊りながら移動する。小鳥が空を切って飛ぶような軽やかさであったため、ウイルソン牧師は、彼女の足が床についていたのか否か訝るほどである。彼はデイズデイルにあてつけて、このお転婆娘は魔法使いなので老婆の魔女が飛行に使う箒は不要と言う。ロジャー・チリングスワースは不思議な子供には違いないが、母親譲りとはすぐ判るものの、この子の本質の分析と、表面上の造りから父親を何とか言い当てるのは哲学者の研究の手に余ると述べる。最後に、ウイルソン氏は総督の下した裁定に従って、世俗な哲学の力を頼りにその様な問題を解かんとすることこそ罪深いことで、断食してお祈りを捧げることこそ相応しく、さらに相応しいのは、神様がお示しになるまでは秘密としてそっとその儘にしておくこと言う。そうすれば、善良なキリスト教徒の男性は誰でもこの哀れな父無し子に父親の優しさを示す権利を手になることになる。

ヘスター・プリンとパールにとって重大な問題が首尾よくかたずいて、二人は家からたち去る。

The affair being so satisfactorily concluded, Hester Prynne, with Pearl, departed from the house. As they descended the steps, it is averred that the lattice of a chamber-window was thrown open, and forth into the sunny day was thrust the face of Mistress Hibbins, Governor Bellingham's bitter-tempered sister, and the same who, a few years later, was executed as a witch.¹⁴⁾

彼らが階段を下りているとき、ある部屋の窓の格子が開いて、中からベリンガム総督の邪悪な気質をした妹で、ヒビンズと名乗る人が顔を覗かせると、日の目が当たる。二、三年後に魔女狩りにあった御当人である。二人がこの家を訪問するためにやって来たとき、玄関にたどり着くが、階段はのぼっていない。階段があるのは、広間から庭に出る窓の外である。とすると、裏口から暇したとも考えられ無くもない。格子の嵌まった個室は、一階南側と考えられる。個室は、広間から、直接、間接に接続される構造になっている。安全の確保のための格子は、二階でなく、一階に必要な建具と言えるからでもある。彼女に呼び止められたヘスターは、その夜に執り行われる森での愉快的集会への招待を受ける。ヒビンズの不吉な人相は、完成したばかりの家に影を落としているように見える。彼女は魔法使いと結託していて、美しいヘスターを仲間に入れるための手筈をほぼ整えている。しかし、ヘスターは、勝ち誇った笑みを顔に浮かべて断りのことずてを頼む。彼女は小屋を留守にするわけにはいかない。我が家にいて彼女の可愛いパールの見張り番をしなければならない。守らなければならない人が居る人は強くなれる。もし、この日会った、社会的に地位も高い重要人物たちが娘を母親から切り離すような措置を取ってしまったら、きっとヘスターは、ヒビンズに森に案内してもらった上、悪魔の名簿に自らの名前を血をインク代わりに署名していたはずである。その時に旨くいかないとしても、いずれ誘惑してみせると言わぬばかりに、ヒビンズは渋面を見せて格子窓から頭を引っ込める。

ヘスターとヒビンズとのこの邂逅は若い牧師デイズデイルの母娘分断反対の説得が正当であることの証拠になっている。この様に、認められた措置早々に、子供が母親を悪魔の罠から救い出すことになるのである。

以上見てきたように、これら第7章と第8章の二つの章は、同じ日の同じ連続した時刻、同じ場所、同じ登場人物達によって、同じ主題、注文された一對

14) *Ibidem*, p.116.

の手袋の持参とヘスター・プリンから娘パールを引き離して養育するという決定を阻止するという問題を解決することであった。ところが、実際には前者は第7章で言及されているのみで、以後一切述べられる気配はないので、後者がより大きな主題であったことが理解される。

さて、ベリンガム総督、彼につづいてウイルソン牧師、チリング医師、デウムズデイル牧師が庭から入ってきた広間との仕切り、パールが広間から出ていった仕切りである「窓」、「出窓」についてである。日本語において、家屋におけるこれらの造作から出入りすることは認められない。それを許すものは「戸」と言うことになる。比較的小さな英和辞典の「窓」 window の項目を引いてみると、この疑問に対する答えは即答されるのである。

window [ことばの起こり] 本来はスカンジナビア語で「風の日」という意味である。ガラスもない大昔、家の壁に通風や見張りのために目のように細くあけられた穴を通して風が吹きこんできたためにこうよばれた。『ニューアプローチ』¹⁵⁾

window 風 (wind) + 目 (ow) → 風の入る穴 1 窓；窓枠 ≪(1)壁にある空所にも、それを閉じる戸にも用いる(2)英米の家では上下に動かす窓 (sashwindow) か、外側に押し開く窓 (casement (window)) が多い(3)窓のすぐ内側の空間も含む≫ 『フレッシュジャーニース英和辞典』¹⁶⁾

前者からは、これが壁に穿たれた大小いずれでも空所、それを塞ぐ窓または戸を示すものであれば良いことになる。窓でも戸でも良い。後者からは、これが窓でも戸でも良いとされている。窓であれば、それは内開きではなく、外開きが多いことも分かる。大会で配付された資料の5の窓は外開きとなり、その内側に台座がある。台座が在るとすれば、窓は、当然外開きとなる。これが戸にも当てはまるか否かは明らかではない。さらに窓および戸のすぐ内側の空間も含むとすれば、ここには「台座」が設けられても良いことになる。

後者の window = 窓が戸にも当てはまるのは何故であろうか。その根拠は何に求められるのであろうか。これらの辞書の典拠となったと思われるものを見てみよう。

15) 『ニューアプローチ』研究社、1984年。

16) 『フレッシュジャーニース英和辞典』大修館、1989年。

*F. window, glazed folding-door POD 1960.*¹⁷⁾

French window, glazed folding-door serving as window and door COD 1925.

French window, glazed door in outside wall, serving as window and door COD 1976.

French window, a long window like a folding door, and serving for exit and entrance.

1801 *Trans. Soc. Arts XIX*, 291 * French windows and glass doors.

1849 THAKERAY *Pendennis* vi The Doctor stepped out of the French windows of the dining-room into the lawn. *OED* 1989.

これらの説明から判断出来ることは、ガラスの嵌められている蝶番で付けた折りたたみ戸、2枚の扉の一方で、窓が戸ないし扉になっている。さらに大きな辞書になって説明がより詳しくなると、この建具が室内ではなくて、外の壁に設けられたもので、窓でも戸でも良いことになっている。1925年のCODには、「外の壁に設けられた」と言う説明が省かれている。OEDでは、さらに詳しく、折りたたみ戸に似た背丈の高い窓で、出入りに供されると説明されている。ホーソンと同時代からの引用もされている。最初のものからは、窓と戸が同等か密接な関係があること、それを可能にしている素材がガラスでありそれを使用した戸または扉の出現していることを示している。二番目の引用は、主語の動作は『緋文字』とは反対で室内から室外へ、庭の芝生へと出ていくものであるが、動詞、起点、場所が酷似している。戸は二枚扉で、これを境界として内外が区割りされ部屋と庭が繋がっている。しかし、作者ホーソンは、この語句“French window”を、彼のいかなる長編の作品にも使用した形跡はない。そのために却って、彼がこの建具にこだわって居たのではないかと思われる。それならば、French doorと言う語句は使われて居ないのであろうか。POD, COD, OEDともにこの語句を見出し語として採用していない。しかし、OEDの補遺、SUPPLEMENT および OED (1989年版)には採用されている。先

17) 小山敏三郎氏は、問題としている窓について次の注を付けられている。「stepped through the window 庭に開くようになっている観音開きの“French window” (p. 105. 2-3 “great hall window”) を指すものであろう。」 N. ホーソン作品集1 詳注 『緋文字』 南雲堂、1976年、337頁。

ず、参考に、研究社の『大英和辞典』の説明を見てみよう。

French door 【建築】 フレンチドア ≪ 方形のガラス入り格子を戸枠にはめ込んだ観音開きの戸；cf. French window ≫.¹⁸⁾

なお、この説明には挿絵が付いている。内側観音開きの方形のガラス入り格子

18) Cf. * The wall separating it(= the dining area) from the kitchen was knocked out, and the entire room was extended 10 feet into the backyard.... The result is a more open, airy space, supplied with abundant sunlight by some of the house's original French doors. "Country Living," p. 96, January, 1997. (leaves;内開き)

- * Inside, the foyer's French doors lead to both the dining room — which features built-in corner china cupboards — and the adjacent living room, where there's a fireplace. "Ibidem," p.118.
- * Additional period details include a wraparound porch, a six-panel front door framed by a transom and sidelights, and a Palladian-inspired window in the center domer. "Ibidem," p.167, March, 1997.
- * ...and French doors that open onto a patio. (sliding) House Plans You Can Buy, The Litchfield, "Ibidem," April, 1997.
- * ...and two pairs of French doors that open onto the front porch. (entrance, 内開き) The Palo Verde, "Ibidem."
- * Overhead, a vintage Fostoria glass collection has its own cupboard, designed in keeping with the room's well-proportioned transoms, classic French doors, and double-hung windows. "Ibidem," p.148, June, 1977.
- * "We see it in tin ceilings, finely carved moldings, and French doors: The lost arts are resurfacing." The entry foyer's doors invite exploration of the kitchen and the garden beyond it. "Ibidem," p.152.
- * The kitchen area's amenities include a pantry, a mudroom, and French doors./As the centerpiece of the plan, the ample family room features a fireplace, French doors, and a staircase to the second floor. "Ibidem," p. 184, 185.
- * French doors and undraped windows capture views of the backyard that provided inspiration for the hand-painted scenes that adorn the backsplash. "Ibidem," p.131, August 1997.
- * Domers, French doors and bay windows at the front and rear welcome sunlight into Jeff Burham's updated farmhouse. "Ibidem."
- * French doors measuring 11 1/2 feet high lead to a screened section of the veranda. "Ibidem," p.120.

戸で、最下部はガラスの代わりに補強板となっている。その上にアーチ形をした欄間窓が付いている。玄関用の堂々としたものである。芝生や庭に出る為のものとしては、大き過ぎるようにも思える。

French door *N. Ameri.* = *French window*

1923 *Southern Calif. Hardwood Manuf. Co. Catal.* Feb. 97 French Doors while intended primarily for outside use — porches, sun rooms etc., are now used to good advantage for inter-room use where lighting or heating is a reason for separating two rooms. 1926 *Daily Colonist* (Victoria, B.C.) 18 July 11/5 (Advt.), Thrown wide between two small rooms, French doors allow you the often convenient space of a large room. 1968 *Globe & Mail* (Toronto) 13 Feb. 30/1 (Advt.) Living room with..French doors to screened veranda. *OED Supplement* 1982, *OED* 1989.

この説明からは、この語句が“French window”と同じものを示し、しかも、これらの例示は窓が戸を意味することになっている。これが北アメリカで使われるようになったことが理解されるが、ホーソーンの時代を下ること約100年と言う差がある。その差によって、この建具の使用用途が変化していることにきずかされる。つまり、元々、これが戸外または日光浴の部屋への仕切りとして使用されていたが、屋内へ太陽からの光熱を利用するために二つの部屋を仕切るために使われるようになっていく。用途は、始めの風から、光、さらには、熱へと変化している。または、小さくなっていく現代の小部屋を、大きく使用するための工夫として、間仕切りのためのフランス戸を開け放っておくと言うものである。このような窓であれば、高貴な面々といえども、堂々と出入りできる戸と言える。

この戸の反対側に位置する玄関の扉についても更に考察することにする。先のフレンチ ウィンドウと同じようにベネチアン ドアー (Venetian door) が考えられるのではないかと言うことである。その前にベネチアン ウィンドウ (Venetian window) についても見ておこう。

Venetian window, v.w. n. = Palladian window

Palladian window n. 【建築】パラディオ式窓（列柱を使う独特の窓で側窓を二つもつ；Venetian window ともいう；cf. Venetian door） 研究社

『大英和辞典』¹⁹⁾

Venetian window (with three separate openings). *COD* 1925.

Venetian window (with three separate openings, central one being arched and highest). *COD* 1976.

Venetian 2. In special collocations, denoting things characteristic of Venice, esp. articles actually produced there, or others made in imitation of these (cf. similar uses of VENICE)

Venetian window (see quot. 1842)

1842 FRANCIS *Dict. Arts*, *Venetian window*, a window in three separate apertures, the two side ones being narrow, and separated from the centre by timber only. *OED* 1961.

パラディオ式、ベネチア式窓はあるが、戸については、パラディオ式は無く、ベネチア式のみが採用されている。Venetian window と Palladian window が密接に結びつくのは、Andreas Palladio (1508—1580) というイタリアの建築家が、主としてベニスを根拠地として活躍したからである。彼の手法がベネチア様式として確立した。これが、特に17世紀の初頭に Inigo Jones (1573—1652) というイギリスのルネッサンス期に活躍した建築家・舞台装置家によってイタリアからイギリスに移入された。これらの説明から、窓の構造が独特なものであることが理解できる。研究社『大英和辞典』からは、柱が並んでいて、それらが窓を挟むようにして支えている。主になる窓の両側に別の窓をもっている。これを更に詳しく具体的にしたもののが、その元になったと思われる *COD* や *OED* の説明であろう。前者の1925年版では、「三分割の開口部をもつ」窓から、1976年版の「三分割の開口部をもっていて、中心のものが弧を描き最も盛り上がっている」窓と、より具体的に改良されていると言える。さらに、*OED* の引用によると、「三分割の開口部をもっていて、隣合わす二つの側窓は中心のものより狭く、木材で分割された窓」となっている。

Venetian door, v.d. n. 【建築】ベネチアンドア≪側戸が二つある； cf. Pal-

19) Cf. A Palladian-style window in a 1793 tavern awaits its arched top sash. A detail reveals decorative woodwork and pilasters. Traces of original Venetian red paint cling to the facade of the 1790 Benjamine Culver House. "Ibidem," p.139, May 1997.

ladian window ≧ 研究社『大英和辞典』

ここでは、Venetian window, ベネチア式窓の説明の窓を戸に変えたものが与えられている。COD には、この語句は採用されていない。

Venetian door a door having side lights on each side for lighting an entrance hall. SOD 1959, 1966.

玄関広間を明るくするために、両側に明かりとりようの窓を具えた戸と定義されている。真ん中の板のみが嵌められて光が遮られるのを補うための工夫を凝らした建て付けである。

Venetian door (see quot.1842)

1842 GWILT *Archit.* 1050 *Venetian door*, a door having side lights on each side for lighting an entrance hall. OED 1961.

OED の引用は、SOD の定義そのものであることが理解される。ここで、もう一度『緋文字』の玄関の戸を思い出してみると、「戸」の形態であるが、上の部分が尖って彎曲している。その両脇が、各々細い塔と呼ばばいいかせりもちと呼ばばよいか、建物からの出っ張りによって支えられ固められているのである。さらに、これら両脇の塔または出っ張りを格子で覆い、その背後に控える窓ガラスの弱さ脆さを補強した上に、木製の日覆いが付いているという手のこみようなのである。」の様に説明されている。これは、先程見てきた、French window, French door, Palladian window, Venetian window, Venetian door を合体させて作り上げた、作家ホーソーンの想像力によるロマンチックな創作物と言える。しかし、ほぼこれに近い物は、研究社『大英和辞典』の French door の項目に付けられていた挿絵にも見られる。さらに、驚くべきことに百科事典アメリカナの DOOR AND DOORWAY²⁰⁾の項目の説明にホーソーンも、しばしば訪れた事のある1821年設立のエッセクス インスティテュートの建物の裏出入口が19世紀初期の新古典主義の様式に沿った例として写真が掲載されている。この説明と思われるが、戸自身と、それが建て付けてある前面の入口の様子が解説されている。この様なアメリカでの堂々たる入口(“portal”)は、革命後に始まり1825年まで継続した連邦以降の様式で始めて登場する。サミュエ

20) *Americana*, Grolier Incorporated, vol. 9, p.293, 1987.

ル・マッキンタイアがセイラムにギデオン・タッカー邸(1808—1809)の凝りに凝った入口付きの玄関を造りあげた。半円に型どられた踏み台と、それと同じ形をした軒蛇腹屋根を支えるほっそりした木製の二本の円柱、二本の半円柱(付柱)、二本の半角柱(付柱)、合計六本の柱は、材質の加工のし易さを知り尽くし、イギリスの建築家アダム兄弟の手法により編み出されたイギリス様式を熟知していたためと思われる。戸も、楕円形の明かり取りが冠のようにその上を飾り、両脇は鉛によって、一定の模様仕立て上げられたガラス入りの細い側窓に支えられている。同じ意匠が写真のエセックス・インスティテュートにも見られたのであろう。これは、極めて貴重な由緒ある建造物と認められている証拠と言えよう。作者も、これには特別の思い入れがあったと考えられる。この様に、特殊な構造物を書き残すにあたって、「それを含む邸宅が、彼らアメリカの古い町に苔むして、崩れかかっている、なお残っているものだ」と、微妙な調子で説明している。崩れるどころか、丁度造られたばかりのままだ、作者は彼自身の文学作品の中でも永久保存しているのである。

French window が床まで伸びて下がってきたものを French door と呼ぶほうが、誤解を避け、より適切に意味を伝えることができると言える。しかし、現在でも古い呼び方が残っている事を示す例がある。上田 篤氏によると、ドイツ人の留学生が、ベルリンの自分の家の間取りの紹介をしている際に、二階の寝室の一つから、外にある小さなバルコニーに出ていくための、日本流に言えば縁側などに設けられているガラス戸(door)のことを「フレンチ・ウインドウ」と呼んだというのである。ドイツは、冬とても寒くなる厳しい気候をもつ北国である。北半球に発達した国々の都市では、そこに建てられている住居では、通例、一階の玄関と勝手口以外には、戸外に出入りする戸ないし扉はない。ベルリン総督邸には、玄関とその反対側にあった庭に通じる「窓」以外に、言及はされていないが、召使の奴隷などの出入りする裏口、勝手口の戸があると想定できる。ところが、ヨーロッパの中でも地中海に面したイタリアやフランスでは、二階にある部屋から直接出られるバルコニー、テラス、パテオ等が設けられていて、仕切りには「戸」が付いていると言う。これを、北国ドイツに取り入れて「フレンチ・ウインドウ」と呼んでいる²¹⁾。著者は、ここで、この呼称に疑問を呈して、これを何故「フレンチ・ドア」と呼ばないのか、「ドイツ人は「窓」からでは入りするものなのだろうか」と書いておられる。八木氏が提出されたと全く同じ疑問である。

上田氏は、さらに、「ベネチアン・ドア」に関しても興味深い事実を紹介され

21) 上田篤『日本人とすまい』岩波新書、1976。「戸」31～38頁。

ている。これを、「ガラス窓の外側についていて、光をさえぎったり、防犯の役をはたしたりする、英語でふつうシャッターといわれるもの」の俗称とされている。これが窓に付いていても、先に話題となった「フレンチ・ウインドウ」に付いていても、いずれの場合にも「ベネチアン・ドア」とされている。「ベネチアン」と呼ばれる理由は、「たぶん日光のつよい地中海のベニスででも発達したものだから」となっている。おもしろいが、ややこしい「窓」と「戸」の相違に関する話に進まれて、示唆に富んだ専門的な知識を述べられている。建物を風雨や外敵による危険を避けるための避難場所と考えると、それに設けられている戸も窓も、両者は開口部と言う共通点はあるものの、一方は「壁」、他方は「穴」から変形、発展したものと言えとする。発生源が異なるものと考えられる。人類が自然の中に見つけた洞窟でしか暮らせないような時代に、その出入口は、大きくて重い岩や丸太等でおおって、保温や外敵から安全を確保したと思われる。とすれば、これら岩や丸太は、「壁の変形もしくは代替物」と言える。他方、「洞窟の上部には、常時、採光や換気のために、壁に穿った小さな穴が必要であった。」崖や、山腹に出来た洞窟で生活するためには、以上見たようにおおうものとしての戸と、うがつものとしての窓であって、各々、元を正せば「壁」と「穴」であると言え。元来、役割の異なる物かもしれないのである。

壁から発達した戸やドアは、「基本的には外界をシャット・アウトして内部世界を防御し」、それでいて開閉が容易に出来るものと言えるので、日本のそれに較べて、断然大きくて重いものではあるが、「動く壁」と言えるものである。それ故、それには、通常、ガラスは容易に割られてしまう危険性があるので、小さな覗き穴に使用される以外には見られないのである。一方、窓は、戸と同じように容易に開閉出来る上に、格子やシャッターやカーテン等を使用して、常時外に向かって開いておく「穴」と考えられる。それでは、ガラスがほぼ全面に使用されていて、戸と言え大いだが、華奢な「フレンチ・ウインドウ」は何故、ドイツにも使用されているのであろうか。戸と異なり閉め切っているときでも光も熱も取り込むことが出来る。北国、北半球で暮らす人々にとっては有り難い自然の恵の利用であり、憧れでさえある²²⁾。安全性、防御性については

22) 小塩節『ドイツのことばと文化事典』講談社、1997。258頁以下「ドイツ・ロマン主義」および同著者『ドイツの都市と生活文化』講談社、1995。274頁以下「6 イタリアへの想い」「7 ゲーテのイタリア紀行—ブレンナー峠からヴェネツィアまで—」によって、アルプスの北に住むヨーロッパの人々の、その向こう側にあるイタリアときらめく地中海、その上に広がる青い空に対する憧れが、いかに強いものであったか、その思いが人を動かし、それを書き残していることを伺うことができる。

どうであろうか。バルコニー、テラス、パテオ等は、通例、屋外に設けられているとはいえ、二階以上にあり、人の行き交う道路からは隔たっている上に、そこから直接侵入することは難しいので、比較的その構造が簡単な窓でも良いということになる。それに対して心配が感じられる場合には、その外側に、さらに一枚の「ベネチアン・ドア」を設けることになるという。勿論、これによって光熱の調節も容易にすることが可能となる。

翻って、私たち日本人の住まいに設けられている、玄関のガラスの嵌められている戸はと言えば、欧米のものと比較して、到底、戸とか扉とは言えない無防備な代物で、「ジャパニーズ・ウインドウ」と皮肉たっぷりに述べておられる。日本人が余程のお人好しか、楽観的な民族といって良いのか、はたまた安全で治安のとても良い国と言えるのかも知れない。しかし、最近、この安全神話が崩れはじめて、再び、欧米並みの戸や格子、「ベネチアン・ドア」等が、必要になっているのかも知れない。その様な工夫は、その昔の日本で、既になされていたことを奈良時代の「板唐戸」、平安時代の「しとみ戸」「半しとみ」、更には、現在も少なくなりはしているものの、地方によっては守られている「雨戸」を見れば理解できるとされている。

ところが、縁側など戸外と接する部分にも、薄くて華奢なガラス窓としか言いようのないガラス戸が多く見られるが、その外側に雨戸がしつらえられていれば、「戸」は二重になっていて、防御の意味をもつのかと筆者は疑問を呈している。しかし、ここでも内側のガラス戸は障子の変化したもので、正確には「ガラス障子」と呼ぶほうが適切であり、その外側に在るはずの雨戸と一体になって始めて防御、安全が辛うじて確保できるとしている。しかし、この雨戸の存続が危ぶまれているのである。機能の面から、美的な加工を施しながら、伝統的に生み出された雨戸を保存して行くことは意味のあることと言えよう。戸は、人間の身長が余程伸びないかぎり、過度に光熱を受けたり、適宜取り込んだ熱を逃がさないようにするために、法外に大きくなるとは言えないが、身長を基準として大きさは維持されると思われる。透視力、透明性能による、外気、外界との一体感、清潔感、耐磨耗性を保つためにも、光と熱を取り入れるためにも、材質としてはガラスが、しかも、強度、保温性を高めるため複層にして多量使用されつづけると言える。安全性は、ガラスの厚さ、その内外からの補強材によって、また、社会制度での安全・静穏・平和と言う外部からの保障によって確保されるであろう。他方、窓はどの様な道を辿るのであるだろうか。光熱の確保、風・空気の吸排気の効率を上げるためには、縦横の大きい、つまり面積の大きい、地上、工夫によっては、地下から、上に伸び、高いところに設置す

るのが効果的であろう。勿論、この場合も建物の構造上の強度を損なわないことが条件である。この様に、シェルターとしての建物とその開口部である戸と窓は矛盾する存在物である。

「フレンチ・ウインドウ」と「フレンチ・ドア」が同一物を示すようになったと同様に、ウインドウ・窓はドア・戸の機能・役割を担いながら益々拡大増殖していくと思われる。それは、ガラス戸²³⁾、ウインドウ・ウォールや、イタリア語 *porta finestra*、ドイツ語 *Fenster-tür*²⁴⁾等の単語によっても理解されよう。

結 び

以上、見てきた『緋文字』の第7章と第8章では、パールが母親ヘスターから生きる希望のよすがとなる光、戯れる太陽光をいくら求めても与えられないものの、入り込んだ、総督の大広間に特別にしつらえられた玄関扉の両脇に設けられたガラス窓をもった塔とその反対側の弓張り状の戸から射し込む光が与えられ、それが、親、娘の両者の仲がさかれることなく、これまでの家庭生活がつづけられること、その実現に手を差し延べたディムズディル牧師によって、父親に代わる人を得て生きる力となる光明を得るよすがとなつて、より完全な生活が営まれる転機になる、重要な章であることが理解された。そのためにも、「弓張り状の戸」は窓ではなく、それよりも大きい、より多くの光を取り入れる戸でなくてはならないことも理解される。

作家は、実際に、人間生活における小さな点にまで思いを馳せていることが、文明の中の一部である建築、そのまた一部品にしか過ぎない窓とか戸を見ても理解できる。それを、此处までのように見てくると、文化論にまで発展して来ることが分かる。建築家の設計青写真とは、多少異なつて、細部に到ると不明な部分とか、矛盾点も出てくることはあるものの、詳細を極め、かつ、現実

23) 以下の引用のように、英語にもガラス戸と言う語句がある。

An angled counter top and a center island define the adjacent kitchen, which includes a sunny breakfast area with sliding *glass door* opening onto a rear deck. In the dining room, another pair of sliding *glass doors* provide access to a screened porch. "Country Living", p.170, August 1997. (引用下線筆者)。

24) この複合語の意味は、窓・戸である。訳語としては次の様な例がある。

「フランス窓」『現代独和辞典』三修社、1977。

「ガラスをはめた扉（ドア）、ガラス戸」 郁文堂、1987。

今まで見てきたように、前者、「フランス窓」は、ガラスの沢山はといった戸のことであり、それはそのまま、後者の訳になり、説明にもなっている。

にあると思われる物を基にして、それを記録して過去を現在に残しているものである。外国に居れば、それら作品に使用されている窓や戸の現在に残っているものを、目にすることが難しいが、さらに資料を蒐集したり、実際にそれらを現地で見て、照合して行けば文学作品がより良く味わえると同時に、異国の文化がより良く理解できると言える。